

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	片 岡 実
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
大村はまの作文教育の縦断的研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	難 波	博 孝
審査委員	教 授	松 本	仁 志
審査委員	教 授	山 元	隆 春
〔論文審査の要旨〕			
<p>戦後、新制中学校に移動した大村は国語科学習指導をする際、読書生活の記録や読書生活通信、国語学習記録などの学習材を用意するほか、「書くこと」を学習に取り入れながら、さらに「読むこと」「話すこと」「聞くこと」を併用し授業を展開する。このように書くことを中心とした指導を開始する時期を大村は、「国語学習記録の指導にはっきりと踏み出したのは、長野県立諏訪高等女学校（以下 諏訪高女）に勤めていた昭和8年4月である（「大村はま国語教室第12巻」（p.5）」と述べている。</p> <p>本研究は、この、大村はまの初任校である諏訪高女の作文教育からはじまり、退職する学校となる石川台中学校（以下 石川台中）までの作文教育を通史的に考察するものである。</p> <p>論文の構成は、次の通りである。</p> <p>第一章では、大村はまの作文教育に関する先行研究の検討を行い、その成果を明らかにした上で、戦前・戦後を通覧した大村はまの作文教育実践研究が乏しいことを指摘し、教育政策の変遷や私的教育団体による論争の中で、戦前・戦後と、大村は、どのようにして書くことの指導を中核に職務を全うしてきたかが未だ明らかになっていないことを述べ、本研究が、大村の作文指導を縦断的に見ていくことで、大村の書くことの指導に関する時期的変化とその変化と普遍性を考察するものであることを述べる。</p> <p>第二章と第三章では、戦前期大村はまの作文教育について通覧している。諏訪高女時代の校長との関わりや実践の詳細を詳細に検討し、また、第八高女（東京府立第八高等女学校）時代の実践を詳細に検討し、戦前期の大村はまの作文教育を明らかにした。ここでは、特に、諏訪高女時代の各校長の教えが大村はまのその後の教育に大きな影響があったことを指摘した。</p> <p>第四章と第五章では、戦後期の大村はまの作文教育について通覧している。第四章では、新制中学に移動後の作文教育（深川第一中学・目黒第八中学・紅葉川中学）についてその実践を検討し、いずれも「発想」、「記述」、「推考（推敲）」の学習を中心に作文教育を展開したことを指摘した。第五章では、文海中学校（以下 文海中）・石川台中における実</p>			

践について検討している。大村はまの戦後作文教育が大きく変容したように見えるのは、文海中の後半からである。前半までは、それまでの「発想」、「記述」、「推考（推敲）」の学習に加え「取材」の学習も取り入れた作文教育を実践しているが、後半からは、昭和三十三年度版学習指導要領に影響を受け、作文教育のための学習内容をまとめた「一覧表」やそれをもとにした「学習問題」を作成している。石川台中では、ここまでの作文教育の集大成として、作文教育のすべての段階が学習できる実践を行っている。

第六章と第七章では、大村はま作文教育を改めて縦断的に考察し、様々に変遷しているように見えながらも、底流に流れる普遍性として、大村の作文教育における指導の特徴を、次の四点にまとめた。

一つ目は、大村の作文教育が学習指導要領の変遷や研究者の示唆、そして、初任期に勤務した高等女学校長からの学びを根幹に、その時代にある生徒の実態や背景に応じ形を変える、しなやかな学習指導であること。

二つ目は、大村の作文教育における教育観が、芦田(1919)の築き上げた「個に応じて文題を示す」作文指導法を心に置き、生徒集団が円滑に学習することができるよう関係性を結び、優劣の関係に自分と他者を置かないこと。

三つ目は、大村の「作文教育の集大成」が、生徒の置かれた時代の文脈に応じながら、戦前から変わらず「描写」「取材」「構想」を生徒と練り、生徒の「心情」に寄り添う指導が一貫して続く、作文指導の姿全体であること。

四つ目は、戦後大村の作文教育の変遷は、勤務校の異動に伴う変容でとらえることはできず、指導の中心を巧妙に変えながら、最終的には単元学習へと変貌を遂げる姿であること。その区分は四期に分けることができること。

なお、「一覧表」の扱いについては、教師である大村の指導は、時流や学習指導要領、研究者・作文団体等の考え方によって時期時期によって変化するため、个体史の中の集大成と位置づけることは困難な面があると結論付けた。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 戦前戦後の大村はま作文教育を通史的に通覧し、その変遷と普遍性を明らかにしたことである。
2. 大村はまの作文教育、ひいては大村はまの教育全体のはじまりが、初任校である、諏訪高女時代にあり、特に歴代の諏訪高女の校長からの指導の影響が大きいことを明らかにしたことである。
3. 大村はまの戦後の作文教育についての論考が少ない中で、その特徴を明らかにし、単元学習との関係や戦前の教育との関連、さらに時代や学校の背景を踏まえて考察した点ことである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 5年 2月 14日